
ヒーロー戦記 - プロジェクトオリュンポス - IN NOVEL

レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー戦記 プロジェクトオリュンポス IN NOVEL

【Nコード】

N8408X

【作者名】

レイ

【あらすじ】

ガンダムを操縦する青年、アムロ・レイ。彼は、ウルトラ大陸代表のウルトラセブンことモロボシダン、ライダー大陸代表の仮面ライダーブラックこと南光太郎達と共に、国際機関「ゼウス」を結成各地で起きるテロにガンダム大陸代表として、仲間達と共に立ち向かう！

この小説は、1992年にスーパーファミコン用ソフトとして発売された「ヒーロー戦記 プロジェクトオリュンポス」を、適度なアレンジを加えて小説化したものです。後、作者はガンダム未視

聴
で
す。

運命の始まり（前書き）

人気作品のファンフィクション小説なので不安ですが、とりあえず
始めます。

では、スタート！

運命の始まり

惑星「エルピス」。

温暖な気候と豊かな自然に恵まれたこの惑星は、3つの大陸と、その大陸それぞれを代表する形の文明が栄えていた。

3つの大陸は、それぞれ本来の名前があったのだが、別の名前の方が有名になりすぎ、今では

本来の名前を知る者も少なくなってしまった。

3つの大陸の俗称はそれぞれ、ガンダム大陸、ライダー大陸、ウルトラ大陸と言う。

ガンダム大陸はモビルスーツを始めとするロボット工学が発達し、ライダー大陸ではサイボーグ技術や遺伝子工学が発達。そしてウルトラ大陸ではウルトラ族と呼ばれる特殊な超能力者が育っていた。

C・C（共通暦）098年、頻発するテロ対策として、光の国、ライダー連邦、エウーゴ共和国の3国が共同して一つの国際機関を設立した。

そして世界は、今激動の予感を秘め動き出そうとしていた。

ガンダム大陸、ダカール市のとある家。

「あゝ、よく寝た……」

その家に住んでいる一人の青年。

彼は、ガンダムを操縦する青年、アムロ・レイ。

アムロはパソコンの電源を入れ、メッセージデータがある事に気付く。

「ん？何か通信が入ってる。」

アムロはそのデータを起動、メッセージを読んだ。

「至急伝える事がある。参謀ビル4Fの
私の部屋まで来てくれたまえ。　ブライト・ノア」

そのメッセージを読み切ったアムロは、洗顔、朝食、排便など全て済ませてから、参謀ビルに向かった。

こうして、3つの大陸、果ては世界を揺るがす一大プロジェクトが、始まるうとしていた…。

Aパート ゼウス結成

参謀ビルについたアムロは、階段を登り続けて4Fに到着、
ブライトの部屋で彼の話聞く。

「遅かったな、アムロ。早速だが、要件を言おう。君は今日付けで、『ゼウス機関』に配属になった。階級も、2階級特進で、大尉に任命されたよ。」

「？何です、そのゼウス機関って言うのは？」

アムロは問う。するとブライトはこう返す。

「ゼット エクストラディナリィ ユナイテッド スペース…略してZ・E・U・S。つまり、連盟特別大使…とでも言うのかな。最近設立された特殊機関だ。」

流石のアムロも、

「…なんかこじつけっぽい名前だな。」

と、返すのが精一杯だった。しかしブライトは、

「政治家のお偉いさんは変な所にこだわるからな。単なる語呂合わせだろう。神話の神の名前にこだわっているのさ。」

と返す。続けて、ゼウス機関の説明をしてくれた。

「ゼウス機関は、我々エウーゴ共和国と光の国、ライダー連邦の3国の連盟により、共同で設立された組織だ。世界中の紛争を未然に防ぐことやテロリスト対策がその目的だ。現在、君を入れて4人のメンバーが決定している。紹介しておこう。さあ皆、入りたまえ。」
そうして入って来たのは、黒髪に橙の服を着た青年と、水色の制服に身を包んだ男性、そして紫の髪の男だった。

黒髪の青年が前に出る。ブライトは、

「彼がライダー連邦の南光太郎。仮面ライダーブラックだ。」

と、説明。光太郎も、

「よろしく！一緒に正義と平和の為に、頑張ろうぜ！」

と、アムロに挨拶。

だが、当のアムロは、

(…なんか、調子狂うな…。)

と呟くが、

「何か言ったかい？」

と光太郎。

「い、いえ。こちらこそよろしく。」

と、ぎこちなくも挨拶を交わすアムロだった。

続いて制服の男性が前に出る。そしてブライトが説明。

「彼は光の国から派遣されたモロボシダン。別名ウルトラセブンだ。」

「

ダンもアムロに挨拶。

「よろしく、アムロ君。君の噂は耳にしているよ。その若さでトッブエースとは大したものだ。」

アムロも照れくさそうに挨拶した。

「そんな…大したことないですよ。運が良かっただけです。それにしてもダンさんが、あのウルトラセブンだったなんて…。」

そこでダンが、「おっと、」と口を挟む。

「その事は出来るだけ秘密にしてもらえないか。まだあまり人には知られたくないんだ。」

事情を知ったアムロは「わかりました。」と返すのだった。

続いて紫の髪の男が前に。

勿論ブライトが説明する。

「彼はギリアム・イエーガー。この間まで軍を特殊部隊に所属していた。ゲシュペンストと言うパワードスーツを使っている、優秀なパイロットだ。」

ギリアムが挨拶した。

「ギリアムと言う。よろしく頼む。」

「よろしく。」

アムロも返すが、

（ふーん、ぶつきらぼうだけど、結構まともな感じだな。）
心の中ではそんな事を思っていたのだった。

「さて、紹介が済んだ所で、これを渡しておこう。」

ブライトがアムロに何かを渡す。

「これは…IDカード？」

「君達の身分を保障してくれる物だ。大事に取っておきたまえ。これを使えば大抵の所はフリーパスだ。まずは5階へ行って指令を受けたまえ。その部屋が君達の本部となる。では、頑張ってくれ。」とブライト。

「嫌だ…と言ってもダメなんだろうね。」

半ば諦めたようにアムロ。

「アムロ、気持ちは分かるが、これは命令だ。それに君にとっても悪い話ではない。」

ブライトが説明。

「…わかりました。」

仕方なさそうに納得したアムロだった。

Bパート テロ鎮圧へ

光太郎達3人と共に5Fに行ったアム口は、部屋の中にあったパソコンのような物のスイッチを入れる。

するとコンピューターが話しかけて来た。

「ようこそゼウス機関へ。私はネットワークコンピューター『ハロ9000』。ゼウス機関の総司令をつとめさせて頂いてます。」

それを聞いた途端、光太郎の目の色が変わった。

「コンピューターが総司令だって!？」

ダンが彼の方を向き、何があつたか聞く。

「どうした、光太郎?血相変えて。」

すると光太郎は焦つたように言う(と言うか、叫ぶ)。

「だってそうだろう!?コンピューターと言えば、何かと言うと反乱を起こして、人類抹殺とか考えたりするじゃないか!大体名前からして怪しげだ。」

だが当のハロ9000はこう返す。

「その心配は無用です。総司令と言っても実際に行動されるのはあなたがたです。決定権などはありません。実際の任務における判断はあなたがたに全て任されています。私は単に世界中から情報を集め、みなさんにお伝えするだけです。大体コンピューターに意識や感情はありません。人類抹殺などナンセンスです。古いSFの見すぎですね。」

それに対し、

「ちえつ。口の減らないコンピューターだ。」

との事。

「そんな事よりこれからのカリキュラムをまず教えてもらおう。」

ギリアムはそれらの会話など華麗にスルーし、ハロ9000に質問。

(…クールだなあ。)

アム口は、嫌でもそう思ったのであった。

とりあえず、ハロ９０００が説明。

「まずは一週間の間、基礎訓練と任務に関する学習をしていただきます。」

「げっ！？勉強があるのかよ！参ったな、そんな話は聞いてないぜ。」

と光太郎。ハロ９０００は、

「当然です。あなたがたには世界の命運がかかっているのですから。それでは始めましょう。まずはこの世界の歴史から……。」

——週間後。

「……と、言った所です。光太郎さん、わかりましたか？」

ハロ９０００が『光太郎に』たずねる。

本人は

「……俺に聞くな。」

との事。

ハ口9000も

「しょうがないですね。体力テストでは光太郎さんの成績は素晴らしいかったですか…。」

と、体力についてはほめる。

「フツ、当然さ。」

光太郎はクールに決めようとするが、ハ口9000は「まあいいでしょう。」ですませる。そして、

「さて、これで全ての訓練は終了しました。後は…。」

と、その時、外で何か大きな音がした！

「わわっ！？な、何だっ！？地震かつ！？」

光太郎は驚き、

「いや、これは爆発です！」

アムロはすぐに爆発と理解し、

「…収まったか。」

ギリアムが冷静に告げる。

「…！！どうやら早くも我々ゼウスの出番が来たようです。」

ハ口9000がそう告げると、

「じゃ、今の爆発は…。」

アムロが聞く。同じガンダムキャラだけあって、息ピッタリである。

「大規模なテロが発生しました。情報が混乱していますが、世界各地で同時に交通や通信の施設が破壊されたもようです。」

「！？何だって！？と言う事は…。」

「世界中の都市が孤立した事になりますね。」

ハ口9000の言葉にダンが驚き、アムロが危機感を覚える。

「各都市を結ぶルートは殆どが破壊されるか制圧されてしまい、軍や警察だけでは手が足りないそうです。我々ゼウスの出動が要請されました。まずはこの町の付近に潜伏していると思われるテロリストを探し出し、逮捕または処刑して下さい。」

ハ口9000は現状及び行動を指示、ギリアムが

「了解した。皆、行くぞ。」

と言ひ、出勤した。

ここに、国際機関『ゼウス』の戦いが、幕を開けたのだ――。

Cパート 変身！ゼウス

爆発がしたほうに向かい、町外れの森に来たゼウス一行。

そこで、

「「「おいお前達！それ以上近づくな！」」」

と、謎の兵士3人が足止め。

「！？ジオン軍の制服…。お前達ジオンの兵士か！？」

アムロは見覚えのある制服を着たその兵士達に問うが、

「ふん、俺達はダカール解放戦線の者だ！ジオンとは関係ない。この服装は単なる趣味よ。」

と、兵士Aが説明。

「兵士A！？まあいい、そんな事よりお前達！早くここから立ち去れ！さもないと…」

兵士Bがナレーションにツツコミを入れつつも、警告する。
しかし、

「さもないとどうするってんだい、テロリストABCさんよ。」

立ち去る気など一切ないゼウスの代表として、光太郎が挑発。

「貴様あつ！我々の崇高な目的を理解せぬサルに分際でなめた口を聞くな！おい、かまわん！やってしまえ！」

兵士Cが（主にABC呼ばわりされたことに）怒り、発砲。
続けて、兵士AとBも発砲。

しかし4人は別方向に逃げて回避、兵士達が驚く。

「「な、なんだお前達！」」

「一体何者だ！？」

兵士AとBが驚き、Cが4人に問いただす。

「問われて名乗るもおこがましいが…。へへへっ、俺たちゼウスの初仕事って訳だ。一応自己紹介しとこうか…」

と光太郎。彼はそのまま自己紹介へ。

「俺の名は、南光太郎。普段はハンサムな好青年だが、ひとたび事

件が起きれば…。」
そして、

「変…身…!!」

そのまま変身ポーズをとり、仮面ライダーブラックへと姿を変えた！

「愛と正義の戦士、仮面ライダーブラックとは俺のことさ！」

続けてダンも、

「僕は、モロボシダン。あまり人前で変身したくはないんだが…。」

そついうと彼は、メガネ型のアイテム『ウルトラアイ』を取り出し

…。

「デュワッ！」

すかさず目にかざし、ウルトラセブンへ変身した！

「こういふのはどうも好きになれんが…。コール・ゲシュペンスト
…!!」

そしてギリアムもゲシュペンストをコール、乗り込んだ。

「とか何とか言いながらギリアムさんも結構のつてますね。最後は
僕か…。僕もギリアムさんと同じでパーソナル転送システムを使っ
てる。」
というと、

「アムロ、いきまーす!!」

というガンダムファンにはおなじみのセリフを言うと、ガンダムに
乗り込んだ。

「…というわけだ、わかったかな？」

「光太郎さん、誰に向かって言ってるんです？」

光太郎のボケ(?)にアムロがツッコミ。

「気にしない、気にしない。さて行くぞ！」

そのセリフに、兵士Bは、

「いい加減モブキャラみたいな扱いやめて!？」

⋮
失礼。

テロリストの森田は舌打ちすると、同じくテロリストの

山田、藤田と共にザクを呼び出し、乗り込んだ！

「ザクか……。ちようどいいですね。パパッと終わらせちゃいましょう！」

アムロが言う。

「全力でok?」

「おk。」

光太郎とギリアムの会話を交え、

「そうか。なら……。エメリウム光線!!!!」

セブンの非情な一撃が森田ザクに炸裂！

「ぎゃひー——！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「森田アアアアアア！……この……。バルカン連射アアアアアア！……！」

山田は叫び、バルカンを発射、それは光太郎に命中した！

「いてっ！？このやろ、よくも！喰らえ、ライダーパンチ！」

そのパンチは、山田ザクに命中、吹っ飛んでいった。

「あれ……！！！！！！！！！！」

「山田アアアアアアアア！！！！！」

「バルカン連射アアアアアアアア！！！！！！」

叫ぶ藤田。彼もバルカンを連射、かわされると舌打ち。でも

「によわあああああああ！！！！！！！！！！」

幾多の戦場を歩いてきた大尉^{アムロ}に、隙はなかった。

「テロリスト達も僕達と同じようにパーソナル転送システムを持っていますね…。あれはそう簡単には手に入らないはずなんです…。」

アムロの疑問に、

「開発したのはアナハイムエレクトロニクスだろ？あそこは節操がないからな、テロリストだろうと何だろうとお客様は神様なんだろう。」

ダンが答え、ギリアムも、

「そういうことだ。結局あいつ等は死の商人なのさ。」

と言い、先に進むゼウス一行だった。

Dパート 特殊部隊全滅

途中で50クレジット（以下Cr。金の単位）やらさらに現れたザク（not山田森田藤田）を倒した分の経験値やらを手に入れつつ、奥の洞窟にやってきたゼウス一行。

「暗いな…。あ、リライブカプセル（回復薬）。」
と光太郎。

「しかし、さっきのグフとか言う奴はザクよりは固いな…。注意しないと。」
とダン。

「ちよつと前に会ったザクレロのビームは強かったな…。お、100Cr。」
とギリアム。

「確かに、ザクはザコですからね。すぐに勝てて当然ですよ。あ、250Cr。」
とアムロ。

「…それ、さりげないギャグか？」
ダンが呟いた。

「奥のほうまで来たな…。」

光太郎が言い、左側の壁が途切れたその時、音と共に銃弾が！

「いつてえ！？おい誰だ！なんて事しやがる！」

命中した光太郎がキレる。しかし、

「ふつ、やはりテロリストがまだ残っていたか。ちようどいい、始末してくれる！」

と、打った張本人、ガルマが隣の男、シャアと共にザクをコール、乗り込む。

「！？このザク、なんか違う！紅と赤！？」

光太郎が言つと、

「よし、紅ザク、赤ザクとでも呼ぼう。」

ギリアムが言つた。

「何だその（紅／赤）ザクとは！」

ガルマとシャアが息ピッタリに叫ぶ。

だが、

「！？待て、ガルマ！少し様子が変だ。」

シャアが突然叫ぶ。

「どうした、シャア？」

「おいお前達、ダカール解放戦線の者ではないのか？」

シャアが聞くが、

「何寝ぼけてやがる！？俺達はゼウスのメンバーだ！お前からこいきなり仕掛けてきやがつて！一体何のつもりだ？！」

光太郎がキレながら叫ぶ。

「そうか、どうやら私達の早とちりだった様だ。すまない。」

それに対し、謝るシャア。そして自己紹介。

「私はジオンのシャア・アズナブル。彼はガルマ・ザビ。ジオンを騒がせていたテロリスト達を追つてここまで来ていたのだ。」

その言葉にギリアムが

「ふむ、ジオンも何かと大変なようだな。ここはエウーゴ国内だと言つのに……。」

と一言。シャアは、

「もちろんエウーゴ政府に許可はもらつてある。」

と言つた。

するとガルマが、

「ふん、そんな物なくてもこの私、ガルマ・ザビが一言言えば許可などすぐに降りるぞ。」

と言つ。

だが、アムロが突然反応を示した。

「ガルマ？ガルマ・ザビと言つと、あのザビ家の…。」

その言葉に、ガルマが返答。

「ふっ…その通り。僕がザビ家のプリンス、ガルマ・ザビさ。」
それに対して光太郎が、

（けっ、なあにがプリンスだ。このパープリンスが…。）

と呟く。と、

「何か言つたかね？」

と反応。

「いえいえ！」

ごまかす光太郎だった。

「先ほどの非礼はお詫びする。どうやらテロリスト共も全ていなくなつたようだ。では我々は報告があるので、これで失礼する。」

シヤアがそう言つと、彼はガルマと共に去っていくのだった。

と同時に、ハ口9000から通信が入る。

「おっ！？なんだなんだ！？」

「ハ口9000からの通信ですね。」

驚く光太郎、通信だとわかつたアムロ。

ハ口9000（注：小型端末）が情報を伝える。

「新たな情報が入りました。ティエス方面の鎮圧に向かつた特殊部隊が、全滅したそうです。我々ゼウスが出向く必要があります。ティエス市へ向かつてください。」

だが、突如ギリアムがあせりつつ、問う。

「！特殊部隊が全滅した！？その部隊の名は！？まさか…。」

冷静に伝えるハ口9000。

「全滅した部隊は、α部隊です。ギリアムさん、あなたが元いた部隊です。」

異常なほどあせるギリアム。

「な…全滅だつて！？くそうっ！テロリストの奴ら…許せん！ニツク…コーニヤ…フレディ…皆、俺の家族も同然だったのに！」

怒るギリアムを何とかなだめ、落ち着かせるダン達3人。
そして、ハ口9000をしまい、洞窟を出るゼウス一行だった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
…。

Dパート 特殊部隊全滅（後書き）

次回、ヒーロー戦記！

地獄大使「わしを知っていると言うことは貴様、仮面ライダーの一人だな。」

ゾル大佐「前座は終わりだ。真打登場といこうか。」

光太郎「本郷先輩！」

ゾル大佐「パワーアップした私の力、見るがいい！」

光太郎「くそっ！どうすりゃいいんだ！」

第2話 ショッカーの野望！

Aパート ギリアムの暗い過去（前書き）

これまでのヒーロー戦記は！

ブライト「君は今日付けで『ゼウス機関』に配属になった。」

光太郎「俺の名は、南光太郎。変身！！」

ギリアム「結局奴らは死の商人なのさ。」

アムロ「ガルマ・ザビと言うと、あのザビ家の…。」

ギリアム「ニック…コーニャ…フレディ…皆俺の家族も同然だったのに！！」

Aパート ギリアムの暗い過去

ダカール市に帰ってきた4人はティエス氏に向かい、謎の男と遭遇した。

「またのこのこと現れおつたな。何度来ても同じことよ。」

謎の男がそういうと、光太郎が、

「貴様！！シヨツカーの幹部地獄大使！！」

と反応、地獄大使も、

「ほう、わしを知っておるという事は貴様仮面ライダーの一人だな。ちようど良い、これまでの恨みここではらしてくれるわっ！！」

と言い切ると、怪人ガラガンダに変貌した！！

「貴様か…俺の仲間達を殺したのは…。」

怒りを見せるギリアム。

「仲間？ああ、あの特殊部隊のことか。そうとも。最もまるで齒応えがなかったがな。」

笑いながら言うガラガンダ。

「…許さん！！」

怒りを爆発させるギリアム、

「ちよつと待てギリアム、それ俺のセリフ！！」

光太郎が珍しくツツコみ、戦闘開始！！

「バルカン発射！！！」

バルカンを撃つガンダム。

「ハハハハハハ！！効かなあ！！」

だが、ガラガンダは無傷。

「エメリウム光線！！！」

光線を放つセブン。が、

「そんな物痛くも痒くもないわ！！！」

やはりガラガンダは無傷。

光太郎が一言、

「つめてえ奴だな。」

とぼやく。と、

「ハロ9000、さっき気になったんだけど、ギリアムさんはα部隊のことを『家族も同然』って言ってたよな。どういう意味なんだ？」

アムロが問う。

「…プライバシーに関わる事ですから本当は言うべきではないんですが…。ギリアムさんは1年以上前の記憶が一切無いんです。」

ハロ9000が言っと、ダンが

「記憶喪失…か。」

と告げた。

「身元を確認するものも全く持っていないませんでした。軍の演習場に記憶をなくして倒れていたのを保護したのです。覚えていたのはギリアムと言う名前だけ…。」

「…なんて暗い過去なんだ…。」

ハロ9000の言葉に、光太郎が言い、

「…なるほど…彼の記憶にあるただ1つの思い出か…確かにしばらく放っておいたほうがいいな…。」

ダンも言った。

町を調査してみると、各地で

「転送センターが占拠された」

「テロリストは一体何をたくらんでいるんだ」

などと言う話を聞き、北の警官に

「あ、ゼウスの方ですか。この町を襲ったテロリストグループはシヨッカーだそうです。さっき犯行声明がありました。」

と言うことを聞くと、光太郎が、

「そうか、やっぱりな…。ここは俺達のライダー大陸に近いからな。ライダー大陸が縄張りの奴らがちよっかい出してもおかしくは無い

だろう。シヨツカーの連中はしたたかだ。警官隊だけではかなり苦
労するはずだぜ。俺たちゼウスが手伝おう。シヨツカーの潜んでい
る場所を教えてくれ。」

と言う。警官はうれしそうに、

「そうですか！それは願っても無いことです。シヨツカーは転送セ
ンターの地下にある動力室を占拠しています。頑張ってください。」
と言った。

そして、転送センターに向かう3人だった。

Bパート ティエス市の決戦

転送センターの入り口に来た3人は作戦会議。

「さて、どうやって忍び込むか…。」

ダンが言うと、

「決まってるさ、正面から強行突破だ！多分ギリアムもいるはずだしな。」

光太郎が無茶にもほどがあると言わんばかりのことを言った。

「相変わらず無茶なことを言いますね。」

アムロはそう言うが、

「いや、悪くないプランだ。ギリアムの事だから、おそらく既にここで一暴れしているはずだ。既に警戒は厳重になっていると思う。」
ダンがギリアムのしたことを予測し、伝える。

「成程…。それならやはり、正面からぶつかっていったほうがいいですね。」

アムロも言った。

「だろ？どうせショッカーなんて単なるザコさ。行こうぜ！」光太郎は先に入り口に行った。

「あ、光太郎！」

「ギリアムさん、無事だといいいけど…。」

2人もそういうと、光太郎を追って進んでいった。

「ライダーキック!!」

「イー————ツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ブラックに変身した光太郎が、入り口にいた戦闘員2人を蹴散らした。

「何やってるんだお前は！」

ようやく追いつき、変身を解いた光太郎に拳骨するダン。

「あだっ!？」

悲鳴を上げる光太郎。

「まあいいか…。行くぞ。」

そういうダンだったが、

「い、痛い…。」

光太郎は、痛がっていたのだった。

その後、リライブカプセルやらスターリングやらを拾い、奥のほうへ来た3人。

そこには地獄大使と、一人の男がいた。

「ここまで来るとは大したものだ。さすが一度わしを倒しただけのことはあるな。」

言う地獄大使。

「？ギリアムはどうした！？」

「ギリアム？ああ、わしを追ってきたやつのことか。先に地獄に送ってやったよ。どうせお前達もすぐに後を追うことになるがな。」

ダンの疑問に答える地獄大使。

「な、なんだと！！貴様あつ！！」

怒る光太郎。

「ゾル大佐、こいつらはわしがやる！手を出すな！」

「わかつている。」

地獄大使と『ゾル大佐』と呼ばれた男の会話の後、

「貴様ら…絶対に」

「許さん！！！！」

「…って、お前らも言うのかよっ！？」

この手のセリフには突っ込むとわかった光太郎を加えたゼウスメンバー、戦闘開始！！

「ライダーキック！！」

光太郎必殺ライダーキックがガラガラランダに炸裂！

「おふっ！？」

「アイスラッガー！」

セブンも頭の宇宙ブーメラン、アイスラッガーをガラガラランダに向けて飛ばす！

だが、

「甘いわあ！」

見事なフットワークでかわすガラガランダ。でも、

「ガンダムハンマー！」

「なふっ！！？」

直後に放たれたガンダムハンマーは直撃、さらに、

「ぎゃあ あああああああああああ！！！！！！！！！」

「……………」

戻ってきたアイスラッガーに体を切り裂かれたガラガラндаであった。

「ううっ……。ま、負けた……」

変身が解け、爆発する地獄大使。

するとゾル大佐が前に出て、

「ふん、未熟者が……。シヨツカー幹部の面汚しだな。さて、前座は終わりだ。真打ち登場といこうか。」

そう言うところ、ゾル大佐は、狼男に変身した！

「くっ、2連戦となるときついですね…」

吟くアム口。

「そう言うなアム口。この戦いはギリアムの弔い合戦だ！」

「全くだぜ！ 覚悟しろゾル大佐！」

叫ぶダンと光太郎。

「ふっ、その自信がいつまで続くかな!? バルカン乱射!!」

「うううううううううう……！」

バルカンの餌食になった光太郎、4行上のかっこいいセリフはどこへ行ったのか。

「う、嘘ではない！私が死ねばギリアムを殺すように部下に命令してあるからだ。どうだ、取引をせんか？」
と、ゾル大佐。

「暗黒界の取引…ってか。」

「光太郎さん、『暗黒界の』いらないです。」

と、光太郎とアムロのショートコントは置いといて。

「ゴ、ゴホン。さて取引の内容だが、私を見逃してくれれば、ギリアムのとらわれている場所を教えてやろう。どうだ？」

光太郎に問うゾル大佐。

「ちっ…。仕方ねえ、見逃してやる。その代わり情報が嘘だったら地の果てまで追いかけるぜ！！」

仕方なく折れる光太郎。

「おお、ありがたい。ギリアムは、ヌーベル市のわがショッカーのアジトに監禁されている。これ以上詳しいことは言えん。後はおまえたちしだいだ。」

約束どおり、情報を教えるゾル大佐。

「…いいだろう、どこへなりと去れ。」

悔しそうに言うダン。

「今回は私の負けだが、今度会うときはきっちりと決着をつけさせてもらうからな。ではさらばだ！」

そういうと、立ち去っていくゾル大佐であった。

3人は無事ショッカーのアジトを脱出、ヌーベル市に向かう。

「ヌーベル市か、俺のホームグラウンドだな。立花のおやっさん、元気かな？」

呟く光太郎。

「急ごう。早くしないとギリアムが危ない。」

ダンも言う。

「ですね。」

アムロも言った。

Cパート ショッカーのアジトへ

ヌーベル市に着いた3人は、そこで一人の男と出会う。

「ようやく来たか、待っていたぞ。」

光太郎の先輩、仮面ライダー1号こと『本郷猛』だ。

「本郷先輩！お久しぶりです！どうしたんです、こんな所で？」

問う光太郎。

「おや、聞いてなかったのか？僕もこの間ゼウスのメンバーになったんだ。君達に協力するためにやってきたのさ。」

「ナ、ナンダッテエー！？」

言う本郷に驚く光太郎とダン。

「へえ、ハ口9000、手回しがいいな。」

感心するアムロ。

「ただ、僕はまだ訓練が終わってないからこの任務だけの特別参加なんだ。流石にこのところ平和が続いていたんで、腕のほうも鈍っているかもしれない。迷惑をかけるかもしれないが、よろしく頼む。」

本郷が説明するのだった。

本郷猛が仲間に加わった！

「何だ今の！？」

驚く光太郎。

「さて、まずはショッカーのアジトを探さなければいけませんね。」

光太郎さんか本郷さん、心当たりはありませんか？

2人に聞くアムロ。

「うーん…。」

悩む光太郎。

「立花のおやつさんに聞いてみたらどうだろう？おやつさんならこ

の辺りの事には詳しいはずだ。」

『立花のおやつさん』に聞けばわかるという本郷、彼は『アミーゴ』と言う酒場にいると言う。

「そっか！じゃ早速アミーゴへ行こうぜ！」

光太郎も言ったため、アミーゴへ向かう4人だった。

「おやつさん。」

光太郎がドアを開けると、そのおやつさんと思わしき人物がいた。

「おお、光太郎に本郷！どうしたね、ずいぶんと久しぶりじゃないか！！まま、入りなさい。」

おやつさんこと『立花藤兵衛』は彼らを暖かく歓迎、店内に迎え入れる。

「で、わしに何の用だね？まさか仮面ライダーが2人もそろつてただお茶を飲みに来たわけではあるまい？」

藤兵衛が言う。

「おやつさん、このあたりでショッカーのアジトになっているような所知りませんか？」

早速本題に入る本郷。

「俺達の仲間がそこに捕らわれているらしいんだ。早く助け出さないで……。」光太郎も言う。

「ショッカーのアジトか？それなら東の波止場のあたりだろう。あのあたりでショッカーの戦闘員を見たって人が何人もいたぞ。」

藤兵衛はそう言った。

「東の波止場ですね！？わかりました、早速行ってみます。」
ダンはそう言う。

「流石おやつさんだ！伊達に年はくつてないぜ。」

光太郎も言う。

「こら、年は余計だ。」

藤兵衛がそういう頃には、既に4人はいなくなっていた。

東に来た4人は、警官の足止めをくらう。

「申し訳ありませんが、この先は立ち入り禁止です。」
と警官。

「あの、この先にショッカーのアジトがあると聞いたのですが、通してもらえませんか？」

アムロが説明。

「ショッカーのアジトですか！？それなら余計に通すわけには…。

ハッ！ゼウスの方でしたか。これは失礼しました。お通りください。

」

話す最中にゼウスの人間だと気づき、通す警官。

そこを通り、4人はアジトへ向かう。

「イ、イーツ！？お前らはゼウス！何故ここがショッカーのアジトだとわかった！？」

いざ奥のほうに行くと、戦闘員が2人待ち構えていた。

その戦闘員の1人、千堂が叫ぶ。

「バーカ。これ見よがしに見張りを立ててりや、すぐわかるわい

！」

叫ぶ光太郎。

「あ、なるほど。」

納得してしまった千堂。

「感心してる場合か！お前は皆に知らせろ！ここは俺が食い止める

！」

「わ、わかった！」

もう一人の戦闘員、後藤が千堂を行かせる。

「さあ、来い！！たとえ敵わずとも多少の時間稼ぎぐらいは俺にもできるぞ！！」

叫ぶ後藤。

「……なんか、僕達が悪人みたいですね。」

呟くアムロ。

「戦闘員にしては、まともな奴のようだな。おい、悪いことは言わん。今すぐこんなことはやめて、真面目に働くんのだ。」

説得を試みる本郷。

「ふん、お前らなどに警察エリートから下っ端にまでなった俺の気持ちと我らシヨツカーの理想がわかるものか。来ないならこちらへk」
「ライダーキーック!!!」

「ぬぶるあああああ!!!」

理想を語る後藤に光太郎の空気の読めない一撃。

「シヨ、シヨツカーばんざい! イーッ!!!」

爆発する後藤。

「光太郎…。あれは流石に空気を読め。」

「え?」

怒るダンと無自覚な光太郎。

「まあいい。急ごう、ギリアムが危ない。」

ダンのその一声で、出発する4人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8408x/>

ヒーロー戦記 - プロジェクトオリュンポス - IN NOVEL

2011年12月17日12時57分発行